

第十二章 助詞

語句に添つて主として他の語句との關係を表す辭を助詞と云ひます。

例へば「獅子は子を生めば三日にしてこれを谷底へ落す。」と云ふ文の「は」を「ば」にして「へ」の如きは是でありまして何れも活用致しませぬ。

活用せぬ辭には右の外「うれしくも對面したるかな」「私はねえ昨日は參りませんでしたよ」の「かな」「ねえ」「よ」の如く、他の語句との關係をばなれて唯餘情を添へ又は語勢を調へるに用ゐるものがあります。斯るものも形式上之を助詞に屬させます。

助詞は之を分けて第一類乃至第五類の五つに致します。

第一節 第一類助詞 体言に付する格はナス

第一類助詞

第一類の助詞は體言又は體言に準じるものに附きまして他の語句に對する格位を示し又は關係を定めるものであります。之に屬するものは他の種に屬するものと同じく、一つで二三の用法を兼ねたり、二つ以上で一つ

の用法しかなかつたり、色々複雑して居りますから、便宜夫々の助詞を題目にしてお話しすることに致します。

が「か」は主として左の二つの場合に用ゐます。

一、文の主語を示すとき。「鳥が鳴く」「道が遠い」。但し文語に於きましては此の場合に「か」を用ゐる事は至つて稀で、夜更けぬ、風涼し。の如く主語は助辭の助を假らないで現れるのが普通であります。併しながら書見るが樂し。「智無きが多し。の如く、用言又は用言を根帶とする語句を承けまする時には、此の「か」を用ゐることが多いのであります。

二、節（便宜主語・述語を具備した連語）の主語を示すとき。「わが行く道」「君が讀めるは何の書ぞ」「夜毎に物が思はれて」「妹が申した事」「あなたが入らつしやるのは險呑だ」「日が長くなつたけれども」。但し文語に於きましては此の場合に「が」を用ゐることは至つて稀であります、唯代名詞には多く「が」が附くやうであります。

此の外「が」は「梅が枝」「賤が家」「わが國の如く」「所有又は係屬を示すこともあり、ますが、代名詞に附く場合の外は餘程其の用法が限られて居ります。此の

場合に於きまして、古くは下に來る體言を省いても用ゐました。例へば「此の歌或人の曰く人麿かなり。」

の「のは主として次の五つの場合に用ゐます。

一、上の體言の所有する意を示して下の體言を限定するとき。「海の水」鹿の角辨慶の長刀机の脚

二、下の體言に屬して之を限定するとき。「故郷の母」日本海の戦朱の玉垣

貫之の歌 普通の文典には此の「の」の用ゐられた場合の意味を吟味して、故郷の母の「のは」にある「の」の義である、日本海の戦の「のは」に於ける「の」の義である、杯と一々數へ立てるのでありますが、「の」に本からそんな意味があるのでありません。「のは」或體言に附いて他の體言を限定するに用ゐられるので、或體言に附いた上で、初めて種々の意味を生ずるのであります。

右の二つの場合には下の名詞を省いて云ふことがあります。例へば「今のあるじも前の」も出て來りぬ、君のは絹で、僕の「は」木綿だ。

三、用言（助動詞の附いたもの）の連體形に附いて或名詞に代るとき。「燕の飛ぶの」速度は早い疑はれるの事がつらい「一番よいの品を取る。」之は、口語に

用言の連體形に附いて或名詞に代るとき。

體言の連體形

體言の連體形

の

限るのです。✓又用言又は用言を根帶とした語句の限定する體言を上にくときには、體言のあつた位置に「の」を置くのが常で其の「の」は本の體言の代に用ゐられるのであります。例へば、

新らしく建てた家に移る。―家の新しく建てたのに移る。―古い切手を集める。―切手の古いのを集める。

四文の主語を示すとき、殊に餘情を含んだ文又は感動を表した文の主語を示すとき。「しづるゝ空に秋風の吹く(コトヨ)」「思ひ盡させぬ世の中のうさ。」入りにし人の音づれもせぬ(カナ) 此れは、文語の用法で、あがります。

✓之につけて一つ申してあきたいと思ひますのは、從來の如くの意の「と云つたものに關する事柄であります。例へば

吉野川岩浪高く行く水の早くぞ人を思ひそめてし。

風吹けば峯に別るゝ白雲の絶えてつれなき君が心か。

などの如く用ゐた「の」を從來の如くの意の「のだ」と云つて居るのです。併し私が考へますのでは、此の「の」も矢張主語を示すものであらうと思ふのです。即ち前の歌の「のは早くの主語の行く水を示し、後の歌の「絶えの主語

る、主決まら

は、續く、もの

一、補は、ニツケル

い、動作、標的

い、比、準、す、べ、き、もの

に

の「白雲」を示して居るのであつて、唯「早く」「絶え」を一轉して後の句の副詞とした所が普通の散文にない特別の修辭であると思ふのであります。

五、節の主語を示すとき。「花の咲く頃」「賢き人の富めるは稀なり」「落つる涙の玉ならば」「色の白い人」「日の立つのは早い」。

右の外口語の「のは」「何の」「彼の」と小言ばかり。「死ぬの」「生きるの」と大騒ぎ。「善いの」「悪いの」と云つても、「の」如く、語を接續するにも用ゐることがあります。

に「には」主として次の七つの場合に用ゐます。

一、自動詞又は他動詞の補語を示すとき。「鏡壁にかゝる」「英語を生徒に授く」「影が水に映る」「豆を鳩に遣る」。此の場合に於いて「には」多くは動作の標的になるものを表すのであります。又比準すべきものを示すこともあります。「此の人々の志は海に劣らず」「兄にも勝る」。

二、所動の動詞の補語を示すとき。「學問に誤らる」「泥棒に取られる」。

三、令動の動詞の補語を示すとき。「牛馬に引かしむ」「書生に送らせる」。

四、補語以外の體言に附いて副詞の如く用ゐるとき。此の中には次の様な場合があります。

1. 動作の歸着する地位を表すとき。「郷里に歸る」「屋根に立つ。」

2. 動作の起る時限を示すとき。「朝に道を聞き、夕に死ぬ」「五時に起きる。」

3. 動作の原因になる物事を示すとき。「財貨に心惑ふ」「犬の鳴く聲に目が醒める。」

五、尊敬の意を表すべき主語を示すとき。此の場合には多く下には「又は」「も」を伴ひます。「君には如何に思召す」「殿下にも台覽あらせらる。」之は口語には用ゐませぬ。

六、或物事に添加する他の事物を示すとき。「庭の千種に蟲の聲」「鬼に金棒。」即ち「庭の千種」「鬼」が主要なもので、それに「蟲の聲」「金棒」が添つて居るのであります。此の用法が一轉いたしましたは「牡丹に唐獅子、竹に虎」「竹に雀、柳に燕」の如く或物に配合する他の事物を示すに用ゐる、又「字紙鳶に繪紙鳶」「ビールに正宗にマツチに煙草」の如く物事を列擧するに用ゐるのであります。物事を列擧するのは口語に限る用法であります。

七、體言と動詞との中間に立つものに附くとき。「若菜摘みに行く」「花を見に行く。」斯の如く用ゐたには下の動作を起す目的になる物事を示すので

あります。

✓右の外には文語に於て「夜たゞ明けに明く」「涙を落しに落す」の如く、同じ動詞の間に挟まつて句を作つて、或動作がひとむきに行はれることを示し、又口語に於て「行くに」「行かれぬ」「言ふに言はれぬ」の如く連體形の動詞に附き、否定、勢、動の同じ動詞に續けて、或動作をしようとしてもされにくい意を示すに用ゐることがあります。

を「を」は次の二つの場合に用ゐます。

一、他動詞の客語を示すとき。「書を読む」「犬を打つ」。

二、自動詞の表す動作の行はれる場所又は起發する場所を示すとき。例へば「路を行く」「川を下る」の如きは動作の行はれる場所を示し、「家を出づ」「舟を上る」の如きは動作の起發する場所を示すのでありまして、「が動作の歸着する場所を示す」と相對するのであります。

と「と」は主として次の五つの場合に用ゐます。

一、主語的又は客語的補語を示すとき。「蛤雀と化す」「木石となる」「花を雪と見る」「遠雷を車の聲と聞く」。之は文語に限るので、口語では多く「に」を用ゐる

のです。

二、主語と共同の作用をする物事を示すとき。「父と語る」「友達と遊ぶ」。此の場合に於きまして「と」の下に共同の意を表す語を補ふ事もあります。「兄と共に旅行す」「君と一所に田山君を訪ねよう」。

三、主語と比準すべき物事を示すとき。「彈丸雨と飛ぶ」「水とは軽い」。

四、物事を指定するとき。「之を大化の改新と云ふ」「關東には洪水ありき」と聞く。「江戸を東京と改める」「敵艦が見えろ」と知らせる。

「と」が連體形
を受くる慣例

「と」が用言又は用言を根帶として居る語句を受けるときには、終止形、命令形等、總べて意味の切れる所を受けます。尤も中古の物語等に「と」が連體形を受けて居るやうに見えるものもありますが、實は皆下に略語があるのです。併し鎌倉時代のものから語の省かつて居ると否とに關せず、連體形を受けるのがだん／＼多くなりまして、今日では殆ど常格のやうになつて居るのです。それで「文法上許容すべき事項には之を許容して居ります。即ち「月出づ」と見えて「嘲弄せらる」と思ひて「終日業務を取扱はしむる」と云ふの如く云つても差支ないことになつて居ります。

最後の語句の
「と」を省く慣
例

五、物事を列舉するとき。「月と花とを賞す。」攻むると守ると何れか易き。京都と大阪と長崎へ行く。行くのと歸るのとどつちが早いかな。

此の場合に文語に於きましては語句毎に「と」を履むのが常則であります。が、既に中古の時代から稀に最後の「と」を省いた用例もありますし、殊に近代ではこれが最も多いのですから、文法上許容すべき事項に之を許容して居ります。併し「史記と漢書の列傳を讀むべし。」の如き文は「史記と漢書との列傳を讀むべし。」と云ふ意味なのか、史記と漢書の列傳とを讀むべし。」と云ふ意味なのか不明瞭であります。文に依りては斯る誤解を招き易いこともありますので、さう云ふ場合には尙「と」を履まなければならぬことに規定されてあるのであります。

右の場合の外文語では「吹きと吹きぬる。」「行きと行きて。」の如く同じ動詞の間に介つて動作を強く言ひ表し、「いざともいざや。」「うれしともうれし。」の如く他の助詞の「も」と合し、「とも」となつて、同じ語の間に介つて、其の事柄を強く言ひ表すこともありえます。

へ「へ」は次の二つの場合に用ゐます。

「に」と「へ」と
の區別

より・から

一、動作の進行する、目標を示すとき。「前へ進む」「東京へ行く」。
二、動作の歸着する地位を示すとき。「棚へ上げる」「箱へ入れる」。これは口語に限ります。

「に」と「へ」とは口語では殆んど區別なく用ゐられて居るのですが、文語では「に」は動作の歸着する地位を示し、「へ」は其の進行する目標を示すことに判然區別して用ゐられて居るのです。尤も「東京へ行く」を「東京に行く」とも云ふことが出来るのですけれども、其の心持は違ひます。即ち「東京へ」と云つた時には、行く目標を示すので、動作が其の地位で止まるや否やは之を度外におくのでありますけれども、「東京に」と云つたときには、必ず其の所で止まることが考にはいつて居るのであります。で、文を作るときには必ず此の區別をして書き表すことを必要とするのであります。

より・から 「より」からは次の二つの場合に用ゐます。

一、動作の起發する物事を示すとき。此の場合に於きまして、文語では多く「より」を用ゐ、口語では専ら「から」を用ゐます。「夜半より出て立つ」「田舎から來た」。尤も文語でも古くは「明日からは若菜つまむ」「ここから山籠して侍る」。

の如く「から」をも用ゐて居たのであります。

「より」はかく動作の起發する物事を示すのですが、古くは少しく此の用法を轉じて、動作の經由する地位を示すこともありました。例へば「あたりより」だにな歩きそ。「家の前より」わたりたまふ。「よりの如きもので、前のは家の近所でも通つて行くな。後のは家の前を通つてお出でなさつた。」と云ふことであるのです。古來これを「を」に通ふ「より」と申して居りましたが、「を」とは少しく違ふので、「を」は或場所を、範圍として其の内に動作の行はれることを示し、「より」は或場所を通つて他へ行くことを示すのであります。

「より」からは此の用法から轉じて動作の原由を表すにも用ゐられます。例へば「酒は米より」醸す。「一旦の失敗から」すつかり弱つてしまつた。「物事の原因を表す」から「はこんな用法から再轉したのであります」。

二、主語と比較すべき標準を示すとき。此の場合には口語も文語も「より」を用ゐます。「山より」高く、海より「深し」。「君より」後れる。「口語では「山より」か高い。「それより」か大きい。」のやうに「より」の下に「か」を添へることがあります。「より」かは省いて「よか」とも云ひます。

「より」は前の諸例の如く、多く、體言に附いて用言にかゝるのでありますが、又内外、前後、左右、上下、東西、南北の如き、双對的の體言に續けて之を限定するに用ゐることがあります。「これより」内は越後の所領なり。「鳥より」先に鳴き初む。「五圓より」上の品はない。「東京より」西の方は平野だ。「ほか(外)」と云ふ語を續けますときには、下に消極的の用言が來ます。例へば「風より」外に知る人もなし。「あなたより」外に友達はない。「の如き」類で、今日「五厘より」ない。「二人より」集らない。などと申しますのは「外に」を省いた形であります。

まで 「まで」は動作の終局する物事を示すときに用ゐます。「北海道まで」行かむ。「十時まで」勉強す。「晴れるまで」待つ。「乞食にまで」なつた。「從來」花と見るまで雪は降りける。「物や思ふと人の問ふまで」の如く用ゐたものを「ほど」又は「ばかり」に通ふ「まで」と云つて居たのですが、これも尙動作の終局する物事を示すと云ふので解せると思ひます。

「まで」は「初から終まで」起さるから寝るまで「の如く屢々」からと相對して用ゐられるのであります。

で 「で」は口語の助詞で、主として左の四つの場合に用ゐます。

まで

で

だの

は

一、動作の場所を示すとき。「神田で買った。」「海岸で遊ぶ。」

二、動作の時限を示すとき。「一週間て出来た。」「後て話さう。」

三、動作の所由を示すとき。「筆で書く。」「船で歸る。」

四、動作の原因を示すとき。「風で倒れた。」「病氣で死んだ。」

だの 「だの」は口語の助詞で、物事を列擧するに用ゐます。「獅子だの虎だの象だの色々な毛物を飼ふ。」筆だの墨だの紙だの色々貰つた。」之は「とは違つて物事の他にもある事を示すので、常に語毎に之を履むのであります。」

第二節 第二類の助詞

第二類の助詞は種々の語に附きまして、之に勢力を與へ又は之を制限するものであります。

は 「は」は或物事を標出するに用ゐます。「日本は神國なり。」散りは果つとも。行きはすらめど。悲しくは思へど。稀には來る。彼とは異なり。酒は飲む。降りはしなう。遠くは行くなり。慥には云へなり。仙臺よりは遠し。」

口語では「來は來たが」「讀みは讀むが」の如く、同じ動詞を重用して、動作を強く言ひ表すにも用ゐられることがあります。

「はは茶をば飲めども」「行かずんはあらず」の如く音便で「ば」に言ひます。「はが」「を」の下に来るときには口語では「茶は飲むが」の如く多くは「を」を省きます。

も 「も」は主として次の二つの場合に用ゐます。

一、並列するとき。「山も川も見えわかず」「嬉しくも悲しくもなし」「都會にも地方にもあり」「女も子供も働く」「見もし聞きもした」「善くも悪くもない」「西からも東からも出る」「即ち前の「ば」は他を排斥するし、これは他を包括するのであります。尤も物事を並列せずして、川も見えわかず」「女も働く」の如く、一つしか舉げない事もあります。其の場合には並列する他の物事が省かれて居るのであります。

二、意味を深く表すとき。「千圓も費す」「辛くも終へたり」「花よりも紅なり」「二十人も居る」「遠くもない」「はからずも會つた」。

口語では此の外「飲みも飲んだ」「高いも高い」の如く、同じ用言を重ねて動作

だにすら

有様を強く表すこともあります。

だにすら 「だに」すらは何れも文語の助詞で、或物事を指示して他を類推させるに用ゐます。「雨だに降らずば行くべし」。「見だに送りたまへ」。「乾きだにせよ」。「月をだに飽かず思ひて寝ぬものを」。「禽獸すら恩を知る」。「亂世にてすら然り」。此の二つの助詞の區別に就いては古來種々に論じて參りましたが、二三の例にこそ適用されるが、他には適用されぬのが多いやうであります。で、私は前述の如く廣く云つて置いて、微妙な所は多くの實例に就いて自然に感得して戴きたいと思ふのです。唯一つ申して置きますのは、「だに」は用法の範圍が廣くて「すら」はそれが狭い。「すら」の用ゐられる所に「だに」は用ゐられるが、「だに」の用ゐられる所に「すら」の用ゐられぬ場合があると云ふことであります。

さへ

「だに」は「も」が附いて「だにも」となり、省つて「だも」となることがあります。「聖には孔子だも居らず」。「心にだも深く念じつれば佛も見え給ふなりけり」。

さへ 「さへ」は次の二つの場合に用ゐます。

一、一つの物事の上に他の物事の添加する意を示すとき。「己が名のみか

は親の名さへ出てつべし。あすさへ降らば若菜つみてむ。雨が降るのに風さへ吹く。」

二、或物事を指示して他を類推させるとき。「水さへ喉に通らぬ。行きさへすればよからう。聞いてさへぞつとする。」これは口語に限るので、前の「だに」すら用法が廢れて、これと次の「でも」に移つたのであります。

でも「でも」は口語の助詞で、これも或物事を舉げて他を類推させるときは用ゐます。「此の位な事は子供でもする。教へてもすれば覚えよう。早くてもあれば行くのだが、少しでもよい。」こゝからでも見える。これは又「水でも湯でも一杯下さい。」食はないでも飲まないでも我慢出来る。のやうに彼と此と對照して云ふこともあります。

ぞ・なん・こそ

ぞなんこそ 此等は何れも物事を強く指示するときに用ゐるのですが、「ぞ」と「なん」とは調子が緩く、こそは急であります。更に「ぞ」と「なん」との別に就いて申しますれば「なん」は「ぞ」と云ふべき所をなだらかにゆつたりと云つたので、散文に使ふが歌には殆んど使はぬのであります。「ぞ」と「こそ」の別に就いては「脚結抄」に比喻を以て説明してあります。「例へば石と玉とを混じて

人の持つて居るのを「それぞ玉よ」と指し教へるのが「ぞ」で、玉を選び出して、我手にとつて「これこそ玉なれ」と教へるのが「こそ」である。「ぞ」は廣く、「こそ」は狭い。「ぞ」は廣いから緩く、「こそ」は狭いから強い」と斯う説明して居るのですが、大體の區別はこんなものであらうと思はれます。文章の中に「ぞ」「なん」が現れるときには、用言の述語を連體形で結び「こそ」が現れるときには之を既然形で結びます。口語には「ぞ」「なん」は全く廢れ「こそ」が僅に残つて居りますが、述語の結びには一向關係いたしません。

ぞ―風ぞ強き。思ひぞ歎く。善くぞこし。又ぞ行かむ。めなれぬ
事のみぞ多かる。

「ぞ」が語句を指定する「と」の下に來ますときには、最も多く其の下の語を省きます。

感じ合へりとぞ。人を食ふ人種もありとぞ。

なん―富士の山なむ殊に古より名を得たる。疾くなん來ける。し

かなん思ふ。月をなん賞づる。

これも「と」の下に來ますときには、多く其の下の語を省きます。

昔は男も髪を結びけりとなん。

こそ——花の中にも櫻こそめでたけれ。咲きこそ匂へ。歎きこそすれ。善くこそ來つれ。さらにこそ信じられね。身に添へる影とこそ見れ。

私こそ御無沙汰をして居ます。手を下して殺しこそせぬが、殺したも同様だ。ようこそお出でになりました。それを思へばこそやかましく云ふのだ。

し「しは物事を指示する時に用ゐます。併し前の「ぞ」「なん」「こそ」の如く、文の結びには關係致しませぬ。君し思へば我もたのまむ。待ちにし待たむ。いづしか來らむ。范蠡なきにしも非ず。これは文語の助詞であります。

のみばかり「のみ」ばかりは物事の外にはない意を示すときに用ゐます。文語では此の二つ乍ら用ゐますが、口語では「ばかり」を用ゐます。

のみ——我のみ行かむ。荒れのみまざる。一間を誤れるのみ。嬉しくのみ思ふ。道の遠きのみ。斯くてのみ世を過す。學問にのみ耽る。

のみ・ばかり

ばかり――住家ばかりは人手に渡さじ。今來むと云ひしばかり。色の紅きばかりを擇ぶ。今日ばかりは曇れ。淋しとばかり言ひすてて……。

毎日雨ばかり降る。金をためるばかりで使はぬ。綺麗なばかりで品は悪い。賑やかにばかりなる。運動にばかり凝つて居る。

「ばかり」は口語では「ばつかり」「ばつかし」「ばかりなど」と種々に變化して居りますが「ばかり」又は「ばつかり」の外は用ゐないことにしたいと思ひます。「ばかり」は右の外分量程度を云ふ時に用ゐることもあり、曉ばかり憂きものはなし、「三年ばかり研究せり」「千圓ばかりかゝる」「八里ばかりある」。

だけ

「だけ」は口語の助詞で、次の四つの場合に用ゐます。

一、物事の、外には、ない意を示すとき。「これだけ残つた。」座つて居るだけで手出しもせぬ。「大きいだけで役に立たぬ。」君にだけ話す。」

二、分量又は程度を示すとき。「百人だけ入學を許す。」食ふだけ稼ぐ。「苦しい

だけ働け。」

三 物事の程度の相當する意を示すとき。此の場合には、にを伴ふことが多う御座います。「學者だけに理屈を云ふ」「金をかけただけに立派だ」「値の高いだけに品がよう。」

四 彼と此と程度の順應する意を示すとき。「取るだけ減る」「急しいだけ手がかる。」

ほどくらゐぐらゐ 此等も口語の助詞で、物事の分量又は程度を示すときに用ゐます。

ほど―俵を山ほど積む。「腹の裂けるほど食ふ」「凄いほど青い。」
くらゐぐらゐ―三里ぐらゐも歩いたらう。「透き通るくらゐ白い。」

痛いくらゐ打つた。「少しぐらゐ飲んでもよい。」

「ほどは右の外彼と此と程度の順應する意を示す時にも用ゐます。「讀めば讀むほど分らなくなる」「長いほど便利だ。」

ほかしききりぎり 何れも口語の助詞で、「ほか」「しき」は、物事を除外するときに用ゐるきりぎり「きり」は之を限定するときに用ゐます。

ほど・くらゐ・ぐらゐ

ほか・しき・きり・ぎり

口語

ほかしか—まだ一度ほかしか來ませぬ。遣り通すほかしか道がない。少しほか(し)かない。虚言ウソとほか(し)か思へない。

ぎりぎり—あれぎり(ぎり)來ない。去年の三月逢つたぎり(ぎり)歸らぬ。甘いぎり(ぎり)で、滋養にならぬ。

なり

なり「なり」は口語の助詞で、主として次の二つの場合に用ゐます。

一、類似の物事を列擧するとき。「前は川なり後は山なり要害な所だ。」風は吹くなり雨は降るなり本當に閉口した。「髪は多いなり色は白いなり善い器キ量だ。」

二、類似の物事を列擧して、其の何れでもよい意を示すとき。「日本酒なりビールなり飲んで呉れ。」寝るなり起きるなり勝手だ。「西へなり東へなり行くが善い。」若し上に疑の語が來ました時には、澤山な物事の中の何れでもよい意を示します。「何なり取つて置け。」誰となり行つてお出で。」此等の場合に於きまして、「なり」は「と」を附けて「なり」としても用ゐます。「なり」とは「り」を省いて「な」とも云ひます。

第三節 第三類の助詞

第三類の助詞は用言を根帶とする語句に附いて、他の語句と接續するものであります。

は ばは次の三つの場合に用ゐます。

一、文語の用言の未然形に附いて、また成立しない條件を假定し、既然形に附いて既に成立した條件を表し、または既に條件の成立したものと假定するとき。此の場合には上の條件に對して下に當然の結果を起すのです。

此の事は既に動詞の活用形の用法の所で話して置きましたから、重ねては申しませぬ。唯一つ附け添へて申して置きますのは、古くは「は」が用言の既然形に附いたときにも、下に反對の結果を起した用例があると云ふことです。例へば

暗くなりぬればこなたには火もとまされば……。

道すがら涙押拭ひつゝ、もうでたまへば對面したまふべくもあらず。見ても又またも見まくの欲しければ馴るゝを人は厭ふべらなり。

一説には斯る場合の「ば」の下には「さらぬ理なるを」と云ふのが略されて居るので、尙普通の用法だと申します。併し歌ならさうも略しませうが、散文に文意の不明を來してまで語句を省く筈がありませんから、私は尙古くは「がど」の如く「反對の結果を起すにも用ゐられたと説明して置きます」。

二、口語の用言の假定形に附きまして、まだ成立しない條件を假定し、又は既に條件の成立したものと假定するとき。此の場合も文語と同じく上の條件に對して下に當然の結果を起すのです。詳しいことは既に申し上げましたから説明を省きます。

三、或事柄に他の事柄を添加するとき。これは口語に限る用法であります。「酒もあれば肴もある」「色も白ければ脊も高い」。

と「と」は口語の助詞で、左の二つの場合に用ゐます。

一、用言の終止連體の形に附いて、既に條件の成立したものと假定するとき。此の時にも上の條件に對し、下に當然の結果を起します。「本を讀むと頭痛がする」「長いと切られる」。

二、用言の終止連體の形に附いて、或事柄が他の事柄と同時に起ることを

示すと、き。「行つて見ると、もう居なかつた。」「汽車から下りると、雨が降つて来た。」

からのて

からのて「から」のは口語の助詞で、用言の終止連體の形に附いて、既に成立して居る條件を表すに用ゐます。此の場合にも上の事柄が原因になつて、下に當然の結果を起すのです。

から—そんな所へ行くから叱られるのだ。」「氣前が善いから人に愛される。」「あなたですからお話しする。

ので—頻に勧めるので賛成した。」「暑いので何も出来ない。」「吝嗇なので評判がわるい。

て

て「て」は次の三つの場合に用ゐます。

一、動詞の連用形、形容詞の副詞形に附いて事の次第を示すとき。」「山に入りて薪を採る。」「鎧堅くて矢も通らず。」「雲が晴れて月が出た。」「むづかしくてよめなら。」

二、或事柄に他の事柄を添加するとき。」「風吹きて雨降る。」「山は高く、水は長し。」「學問が出来て品行がよい。」「鷺は白くて烏は黒い。」「

三 動詞の連用形に付き、下の動詞に續けて、熟語の動詞を作るとき。これは口語に多い。「飛んで行く」「買つて来る」「讀んで行く」文語では「飛び行く」「買ひ来る」の如く多くは「て」を介まずに用ゐます。

「ては第一類の助詞の「に」と合して「にて」とて「て」を作り、佐變の「す」と合して「して」を作ります。何れも文語の助詞であります。

(にて)
「にては口語の助詞の「で」のもとで、京にて會ふ。田舎にて暮す。の如く動作の場所を示し「刀にて削る。火にて炙る。の如く動作の所由を示し、頭は俗にて身に法衣を纏へり。前は海にて後は山なり。の如く物事を指定する等、種々の場合に用ゐます。Vにては「に」とてとの間に動詞が省かつて居るので、例へば「京にて田舎にての」にては「に。いて。刀にて火にての」にては「依りて。俗にて海にての」にては「ありての略であるのですから、斯く種々の場合に用ゐられるのです。

(とて)
「とても」と「とて」の間に動詞が省かつて居るのでして、例へば「幸多かれとて別る。又いつかはとて泣く。の」とては「といひて。暑を避けむとて山に入る。書かはむとて町に出づ。の」とては「と思ひての略であるのであります。

(して)

「しては佐變の「す」が「て」と合したのですが、「し」は其の本義を失つて他の動詞の代用をしたり、又は「に」を「と」動詞とから成つたものの代用をしたり致して居ります。例へば「細くして長し」。「鯨は獸類にして海に棲息す」。「一人として背く者なし」。「はありて」の義に用ゐられ、「人をして言はしむ」。「は遣して」。「左に出てむ」として右に出づ。「は思ひて」の義に用ゐられ、「刀して削る」。「はに依りて」。「人して告げしむ」。「はを以て」の義に用ゐられる類であります。「に」を「又は」と「して」との合した「にして」をして「として」は一つの助詞と見ることが出来ます。

ととも

「ととも」「と」は文語に於ては動詞・形容動詞の終止形・形容詞の副詞形に付き、口語に於ては未來時又は推量の動詞・形容動詞に附いて、まだ成立しない條件を假定するときに用ゐます。此の場合には上の條件に對して、いつも下に反對の結果を起すのです。

繪に書くと筆も及ばじ。」「さまでなくと云ひそめてむことは。」「問ふとも答へじ。」「天氣好くとも出でじ。」「敏捷なりとも機を失することあるべし。

死なうととも構はぬ。」「惡からうとともやる。」「何が來ようともとも恐

れない。

「とも」が動詞に接する時には文語では終止形に附くのが常則であります
が、中古から連體形を受けた例もあり、普通文には殊に屢々之を受けますので、
「文法上許容すべき事項」に動詞及び令動所動の助動詞の連體形を受ける事
を許容してあります。數百年を経るとも。「如何に批評せらるゝとも」強ひて
之を遵奉せしむるとも。

ても・も

てもも 何れも口語の助詞で「ても」は動詞の連用形・形容詞の副詞形に附
き「も」は形容動詞又は指定の助動詞の中止形に附いて條件を假定するとき
に用ゐます。（條件の成立して居る居ないは考に入れない） 此の場合には上の條件に對して何時
も反對の結果を起すのです。

ても——行つても留守だ。高くても買ひます。

も——浪は穩かても安心は出來ぬ。顔は佛でも心は鬼だ。

ど・ども

どども 「ど」どもは文語の助詞で、用言の已然形に附いて既に成立した條
件を示すときに用ゐます。斯る條件を示すものは前に「ば」がありましたが、
「ば」は上の條件に對して下に當然の結果を起すの、これは反對の結果を起

ずの」であり、ます。「春立てど花も匂はず」「口惜しきこと多けれどえ盡さず」「問へども答へず」「位高けれども驕らず。」

今日の普通文では前の「と」とも、および此の「ど」とも「の代に」もを用ゐることが屢あります。例へば「何等の事由あるも」ありとも「議場に入る事を許さず」「期限は今日に迫りたるも」たれども「準備は未だ成らず」の如き類であります。此の用法は用言を根帶とした語句の末を第一類の「も」で承けたものの中に、「と」とも「ど」ともを用ゐる場合に當るものも自然に出來たのを、後には原意を忘れて「と」とも「ど」とも「の意に盛に用ゐることになつたのであります。鎌倉時代から漸く多くなつて、遂に今日に至りましたので、試みに一枚の新聞紙を開いて之を検しますれば、忽ち幾多の用例が発見されると云ふ有様でありますから、文法上許容すべき事項には誤解を生ずべき場合、例へば「請願書は會議に附するも」(すれども)之を朗讀せず「給金は低きも」(けれども)應募者は多かるべし」の如き場合に非ざる限り、之を用ゐても妨げがないと云ふことにしてあるのであります。

けれども
けれど

けれどもけれども「けれども」は口語の助詞で、用言の終止・連體の形

に附いて、既に成立した條件を示すに用ゐます。此の場合には文語の「ど」も「の如く上の條件に對して反對の結果を起すのです。」聲はするけれども姿は見えない。「忙しいけれど手傳つてやる。」

「けれども」は「聲はするけれども姿は見えぬ」の如く文と文との接續に用ゐることもあります。

に・の・に・を・
ものを・もの
の・が・ところ
が

に・の・に・を・ものを・ものが・ところが「を」は文語に限る助詞「の」に「ところが」は口語に限る助詞であります。文語に屬する「に」「を」「ものを」「ものが」「が」は何れも用言の連體形に付き、口語に屬する「に」「の」「ものを」「ものが」「ところが」は用言の終止連體の形に附いて、「と」「ども」又は「けれども」の如き場合に用ゐます。

に――日照るに雨降る。暗きにはや起き出づる人あり。

招いたに來ない。早く來れば善いにまだ來ない。

口語てはかく「にも用ゐますが、多くの場合には次の「に」を用ゐます。

のに――日が暮れるのにまだ來ない。財産もないのに贅澤をする。

を――雨降るを傘なしに出づ。價高きを質も好からず。

ものを―彼所にて待ちしものをなど來ざりし。―外に寄べもなきものを文だにあこせず。

あんなに頼むものを聽いて呉れてもよからう。―覺えはないものを疑ぐつて居る。

ものの―さはいふものの總べて然るにも非ず。―悲しきものの泣きもえせず。

來は來たものの會ひたくもない。―恢復は覺束ないもののだ此の世が思ひ切れぬ。

が―屢、訪ひたるが面會を得ず。―見物は多きが商品は賣れず。

勉強したが失敗した。―兄弟は多いが女ばかりだ。

ところが―行つて見たところが似もつかぬものだつた。

「ところが」は「行つて見たところが似もつかぬものだつた」の如く文と文とを接續するにも用ゐます。

文語の「に」、文語・口語の「が」、口語の「ところが」は又或事柄を言ひ終へて、それに關係のある他の事柄を言ふにも用ゐます。

上野へものせしに花は満開なりき。三度登山せしが、常に天氣は天麗なりき。

旅行しようと思ふが、何處がよからう。芝居に行つて見たところが、大層面白かつた。

口語の「が」は右の用法の外に、「雨が降らうが、鎗が降らうが、構はぬ」「深からうが、浅からうが、頓着せぬ」の如く、推量の動詞又は形容動詞に附いて、二つの事柄を並列して、まだ成立しない條件を假定することがあります。此の場合には其の條件に對して下に反對の結果を起します。

つつ 「つつ」は文語の助詞で、動詞の連用形に付き、或事柄の斷續して起ることを表すに用ゐます。「頭を搔きつつ、佗び居り」「酒を飲みつつ、綱手を引く」
ながら 「ながら」は次の二つの場合に用ゐます。

一、動詞の連用形に附いて担任せた意を示すとき。「茶を啜りながら往事を談ず」「道を歩きながら詩を作る」。

二、用言の連用形、形容詞の終止・連體の形に附いて、上の事柄に對して、下に反對の結果を起すとき。「音づれせん、の心はありながら、久しく打絶えたり」。

「苦しきながらも忍びてあり。」「小さいながらもよく働く。」

し「し」は口語の助詞で、用言の終止連體の形に附いて、或事柄に他の事柄を添へ、又は其の上に其の結果を云ひ續けるときに用ゐます。「本も讀むし、字も書く。」夏は涼しいし、冬は暖い。「雨も降るし、風も吹くし、今日は止さう。」朝は早いし、夜は遅いし、少しも隙がない。「俗に、河豚は食ひたし、命は惜しし。」帶には短し、襷には長し。など云ひますのは、「食ひたいし、惜しいし、短いし、長いし。」と云ふ活用形を省いたのであります。

第四節 第四類の助詞

第四類の助詞は文の終又は中に附いて疑問を表し、終に附いて命令又は願望を表すものであります。

やか「や」は文語に限る助詞、「か」は文語・口語共通の助詞で、次の四つの場合に用ゐます。

一、用言を根帶とする文の末に附いて疑問を表すとき。

や―木柴がくれの聲は聞ゆや。人に告げさや。障ることなしや。

や・か

し

か―はや起くるか。君は知れるか。此の川は深さか。

家を建てるか。客は歸つたか。朝は早い。

「か」は又體言にも附きます。「木か石か」。

用言に接するときに「や」が終止形に付き「か」が連體形に附くことは前の例の通であります。併し「や」を連體形に附けることは鎌倉の中頃から起つて、今日では最も普通になつて居ますから、文法上許容すべき事項に許容してあります。「あるや」「面白さや」「父に似たるや」「母に似たるや」。

「や」「か」は古く動詞の既然形に附いた特例があります。「憂きことあれや」「來る人もなし」「明けば又越ゆべき山の峯なれや」「白にだてて歌ひつゝ釀みけめかも」「の如きはそれで憂きことありや」「山の峰なりや」「釀みけむかも」の意を成すのであります。

二 文の中に置かれて疑問を表すとき。これは文語に限るので、此の場合には述語の用言を連體形で結びます。

や―人や來る。「春や疾き花や遅き」歸らむ人を降りやとゞめぬ。

遅くや來つる。「道にやまどへる」。

か―小夜か更けぬる。風か寒き。見る人なしに咲き散るらむ。

見よとかおこせし。

「や」か「か」は共に疑問を表す助詞ですけれども、上に疑の語があるときには、文の末でも中でも概ね「か」を置いて、「や」を置きませぬ。「いづくにあるか」「いかでか知らむ」「何とかすべき」。併しながら今日では上に疑の語があつても、尙「や」を用ゐるのが普通に行はれて居ますから、文法上許容すべき事項には、幾何なるや、「如何なるべきや」、「誰にや問はむ」、「如何なる故にや」、「等の如く用ゐることを許容して居ります。

文の中に置かれる「や」「か」は、下に來る語句を省いて文の結になることがあります。「此の翁、もののつきたるにや」、「何の心ありて、かくは苦しきにするにか」。

≡ 文の末又は中に置かれて反語を表すとき。但し口語の「か」は文の中に置かれませぬ。

や―古今勇士の意氣甚だ似たらずや。思ひきや君に別れんとは。
見てのみや人に語らむ。

か―明日もありとは頼むべき身か。かくてのみ止むべきものか。

何の恐ることかあるべき。いかでか不義の名を取らむ。

驚くまい事か。行くものか。遠いものか。こんなくやしい事が

あらうか。

口語の「か」の反語を表す場合は、かくの如く「事」「物」と云ふ形式的の名詞又は推量の動詞の下に附くときに多いのであります。

文語の「や」「か」は反語を表す場合にも動詞の既然形に附く古い用例があります。例へば「一日も妹を忘れて思へや」散りをむる花を見すて歸らめや。

「絶えず物思ふらめや」筑波の山を戀ひずあらめかも。などはそれで「思はんや」「歸らんや」「思ふらむや」「戀ひずあらんか」の意を成すのであります。

文語の反語を表す「や」「か」は下に第一類の助詞の「は」を伴ふことが多うございます。例へば

やは―招くとも行くべしやは。さる事やはせし。君にやは劣るべき。

かは―あすありと頼むべき身かは。唯まぼろしに見るは見るかは。

いつかは雪の消ゆるときある。

四、物事を並列するとき。但し「や」はそれ等の物事に限らない意を示します。此の場合の「や」は文語にも口語にも用ゐます。「や」を文語に用ゐるのを俗のやうに思ふ人もあるやうですが、古くから用ゐる來つて居るのです。

や―簫や琵琶や笙の笛筆簾など吹き合せ……。

海の中には鯛や鰈や比目魚やいろ／＼な魚がある。

か―君には林檎か梨かを呈せん。

茶かビールか飲みたい。吉田とか吉川とか云ふ人。

右の外「か」は疑の語の下に來て、(1)多くの物事の中の何れか不定なときに用ゐ、又は(2)單に物事の不定な時に用ゐます。前の場合には下に命令形の動詞又は未來推量に關する動詞が來ます。

(イ) いづれかを取れ。何所かに行かむ。

(ロ) 何時か見しことあり。何故か時計止まれり。

(イ) 誰か來て呉れ。何か買ふだらう。

(ロ) 誰か來て居る。どこへか行つた。

やら

やら 「やら」は口語の助詞で、文語の「や」が第一類の助詞の「に」を受け、「あらむ」に續いて「にやあらむ」となつたものの約つて「やらむ」になり、それが語原を離れて助詞の如く用ゐられることになつたのであります。次の三つの場合に用ゐます。

一、物事を推量するとき。「魚やら鰐がある。」「見えるやら笑つて居る。」「腹でも痛いやら泣く。」

二、物事を並列して、其の中の何れだか不定なとき。「人やら毛物やら分らぬ。」「来るやら來ないやら分らぬ。」「多いやら少いやら見當がつかない。」「これが疑の語の下に附きましたときには、單に物事の不定なことを示します。」「何やら出て來た。」「幾らやら分らぬ。」「誰れにやら遣つた。」

三、物事を並列するとき。「笛やら太鼓やらで賑かだつた。」「歌ふやら舞ふやらで大騒だつた。」「悲しいやら淋しいやらで夜も寝ない。」

よ・い・ろ

よ・い・ろ 動詞の活用形の條で述べました如く、文語では四段良變・奈變以外の動詞の命令形に「よ」「い」「ろ」を添へて命令を表すのであります。其の例は既に其の箇處で示ししま

な

したから茲には擧げません。口語では關東地方に於ては多く「ろ」を用ゐ、關西地方に於て多く「い」を用ゐるのであります。

な 「な」は文語では良變の連體形に附く外は總べて動詞の終止形に附き、口語では終止・連體の形に附いて消極的の命令即ち禁止を表すに用ゐます。「我を忘るな。」^{アヤマテ}「過すな。」物に恐れるな。「悪い事はするな。」此の時に口語の場合を文語に混じて「忘るゝな」「過するな」の如く連用形に用ゐることがありますが、誤てあります。

文語では「な」を動詞の上又は熟合の動詞の間にに入れて、下に「そ」を据ゑるところがあります。「いたくな泣きそ。」^な人にゆめ／＼知らせ給ひそ。「打ちな殺しそ。」^な吹きな散しそ。」此の場合には此等の例の如く動詞の連用形を介むのが通則であります。が、加變佐變ばかりは「な來そ」「なせそ」の如く否定形を介むのであります。

ばや・なん 「ばや」「なん」は何れも文語の助詞で、動詞の否定形に附いて願望を表すのであります。併し同じく願望を表しましても、「ばや」は我が動作に關する希望を表し、「なん」は他の動作に對する誂囑を表すので、二つの間に用

法の區別はあります。

ばやー心あらん人に見せばや。都に出てて活計を求めばや。

なんー花も咲かなん。萌え出づる春に逢ひたまはなん。

文語の時の助動詞にも「なん」がありました。が、あれは動詞の連用形に接し、これは否定形に接するから相區別することが出来ます。尤も上下二段上下一段は否定連用の形が同じですから、一寸紛はしうございますが、前後の意義に依つて考へれば、直ちに區別することが出来るのであります。例へば

夏の夜の月は程なく入りぬとも、やどれる水に影はとめなん。

の「なん」は願望の助詞の「なん」で、

君をおきてあだし心を我がもたば末の松山波もこえなん。

の「なん」は時の助動詞の「なん」であるのであります。

古くは右の外願望を表すに「ね」「な」と云ふ助詞も用ゐました。それは「親に申さね」「一目見に來ね」「遊びくらさな」「救ひたまはな」の如く動詞の否定形に附くのです。

が。がも。がな

ががもがな 此等も亦文語の助詞で、多くは「も」「し」「に」「し」「て」「し」の下に用ゐる

す。「も」は第二類の助詞「に」ては時の助動詞の「ぬ」「つ」の連用形「し」は「き」の連體

形でありまして、未來の事を過去に言ひ倣して願望を表すのであります。

がー白露を消たずて玉にぬく物にもが。

甲斐がねをさやにも見しが。

こゝろうし深き山にも入りにしが。

そこともいはぬ旅寢してしが。

がもー常にもがもなトコチトメ常少女にて。

がなー人に知られて来るよしもがな。

秋ならで妻よぶ鹿をきゝしがな。

早くうき世をはなれにしがな。

神てふ神に問ひ見てしがな。

「がな」には又次のやうな用例もあります。

さらむ人をがな使はむところ覺ゆれ。

猶よからむ敵がな組んで、今一人首取らむ。

この「がなは」「何かなあるだらう」「芝居にかな行かう」の如く稀に口語にも用ゐます。

第五節 第五類の助詞

第五類の助詞は文の末又は中に附いて、語調を整へ、語勢を興へ、餘情を添へるに用ゐられるのであります。

や「や」は文語の助詞で、文の末又は中に附いて餘情を添へ、語調を整へるに用ゐます。

面白の景色や。物ぞ覺えぬや。飲めや歌へや。

あはれいと寒しや。あはれや。すはや。

神風や伊勢。近江のや鏡の山。夕月夜さすや岡邊。

「や」が用言に附くには多く意味の切れる所に附くのですが、古くは既然形に附いた用例もあります。例へば「荒磯の岩に碎くる波なれや、つれなき人にかくる心は、程もなく戀ふる心は何なれや、知らでだにこそ月は經にしか。」の如きもので「波なるよ」「何なるぞ」の意を成すのであります。

も

な

ね

「や」は右の外呼掛にも用ゐることがあります。之は口語にもあります。
「蝶や花や」「お花や一寸お出て。」

も 「も」も文語の助詞で、文の末又は中に附いて餘情を添へるときに用ゐます。例へば「鶯鳴くも」「綱手かなしも」「思ひも寄らず」「辛くも我は老いにけるかな。」

な 「な」は文語並に口語の助詞で、多くは文の末に附いて餘情を添へるときに用ゐます。

彼ぞ婿の少將な。水を賜へな。移りにけりな。老いけるよな。

大勢来るな。あれは犬だな。天氣があやしいな。

口語の「な」は長く引いて「なあ」とも云ひます。「大層来るなあ」「やあ面白いなあ。」

口語の「な」は餘情を添へて云ひ掛けるにも用ゐます。「君は毎日散歩するな」「お前ではあるまいな」「大分廣いな」「そこでな」「よいかな。」

ね 「ね」は口語の助詞で、餘情を添へて言ひ掛けるに用ゐます。「今日も降るね」「ほんとうに鬱陶しいね」「君も来るかね」「それにね僕はね、ちと都合もあるからね。」

此の「ねはねえ」と長く引いても云ひます。

よ「よ」は口語並に文語の助詞で、主として文の末に附いて、軽く抑へ、餘情を添へて、呼掛けて云ふときに用ゐます。

我こそは天下第一の名僧よ。再び春は物を思ふよ。耻しさよ。忘るなよ。文治元年の頃かとよ。

大勢居るよ。少しくれろよ。早くお書きよ。それはまづいよ。これだよ。

「よ」は口語では「よう」と長く引いて呼掛を強く言ひ表すことがあります。「少し下さいよう。早く御覽なさいよう。」

「よ」は文語では單に呼掛を表すに用ゐることがあります。「こけの袂よ乾きだにせよ。」

ぞぜ

ぞぜ「ぞぜ」は口語の助詞で、文の末に附いて差抑へ、餘情を添へて呼び掛けて云ふに用ゐます。

ぞー雨が降り出すぞ。もう讀んだぞ。道が悪いぞ。

ぜー風が吹くぜ。早く起きようぜ。面白いぜ。夫は捨てるのだぜ。

さ

さ「さ」は口語の助詞で、主として文の末に附いて指定し、餘情を添へて云ひ掛けるに用ゐます。「あれは犬さ。」「僕も行くさ。」「まあ善いさ。」「だからさ。」「こればかりさ。」「

かし

かし「かし」は文の末に附いて押据ゑて餘情を表すに用ゐます。「いとよう覺えたりかし。」「疾く行けかし。」「いとをかしかし。」「あはれなりかし。」「思ふ心の残るらむかし。」「あさましかりし事ぞかし。」「

か・かも・かな

かかも・かな 文の末に附いて感歎の意を添へるに用ゐます。用言には其の連體形に附きます。「かも」「かな」は「か」に、前に述べた「も」又は「な」の合したものであります。「か」「かも」は最も古うございます。

か―白露を玉にもぬける春の柳か。」「昨日まで早苗とりしかいづの間に稲葉そよぎて秋風ぞ吹く。」「かゝる山中にも住めば住まるるものか。」「

かも―三笠の山に出でし月かも。」「梅の花かと打見つるかも。」「有明の月夜見れどあかぬかも。」「

かな―夜半の月かな。」「夜白浪の面白きかな。」「のどかなるかな。」「洋

洋たるかな。

は 「は」は文語・口語共通の助詞で、文の末に附いて餘情を添へるに用ゐる。
す。

近き皇胤を尋ねば融等も侍るは。これ見よ、まことにおはしました
るは。

わたしも行くは。何でも善いは。否だは。

とも 「とも」は口語の助詞で、物事の確實なことを示すに用ゐます。「君も
行くか。行くとも。」「見てもよいか。よいとも。」「あの人は感心ですね。さ
うですとも。」